

S. Swainston

神学と人文(大阪キリスト教短期大学紀要) 第33集 1993年12月発行 抜刷

ジョン・ウェスリの神学的遺産 (II)

—新生論をめぐって(2)—

岩 本 助 成

ジョン・ウェスリの神学的遺産 (II)

—新生論をめぐる(2)—

岩本助成

- I 序説
 - II 新生論の歴史的系譜をめぐる
 - 1 聖書における新生の教理
 - 2 古代教会における新生論
 - 3 中世教会における新生論
 - 4 ルターの新生論
 - 5 カルヴァンの新生論
 - 6 デイルク・フィーリップスとメノナイト派の新生論
 - 7 ピューリタニズムと敬虔主義における新生論
- 〔以上、第32集に所収〕

III ジョン・ウェスリの新生論

1 ウェスリと同時代人の新生論

ジョン・ウェスリの新生論を考察するまえに、彼と深い関係をもつと思われる同時代人の新生論を素描しておきたい。⁽⁴¹⁾ ウェスリを含むこれらの群像が、その神学的系譜の中でいかに密接に関わり合っているかを探るためである。

(1) 実践的神秘主義者の新生論

—W. ローとJ. テイラーの場合

H. リントシュトレームが「実践的神秘主義」と呼ぶ陣営に、ウィリアム・ロー(William Law, 1686-1761)とジェレミ・テイラー(Jeremy Taylor, 1613-1667)がいる。⁽⁴²⁾ ローは、「宗教に毒づく一種の放縦な論客」であったサミュエル・ジョンソンを、彼の著作に触れた後、生涯、真摯な思弁の対象として宗教を考えるように変えてしまった程の著作家であった。⁽⁴³⁾ 『キリスト者の完全についての実践論』(A Practical Treatise

upon Christian Perfection) 1726年、と『敬虔にして聖なる生活への真摯な召命』(A Serious Call to a Devout and Holy Life) 1728年、など、多くの宗教的著作がある。彼はたとえば復讐を例証して次のように述べる。「もし宗教が過当な復讐を抑制するだけに止まり、靈的には低次元な事柄であなただを生かしているだけだとすれば、あなたの宗教はその生活には僅かな外面的影響を与えているに過ぎず、あなた自身に幸福や平安を与えるものは全く存在しない。しかし、もしあなたが神に似たものとなって自分自身を放棄するために、また、愛と栄光の御国における神の憐れみに適したものとなるために、神に従ってすべての復讐心を全く神に献げ切り、あらゆる時に悪を離れて善に立ち戻ろうと決心するなら、それこそあなたに幸福を感じさせる徳の頂点というべきであろう。」⁽⁴⁴⁾

ローにとって救いの道は、十字架を負いキリストの生涯に従う苦闘である。もちろん彼も救いを得る唯一の道が、キリストの贖罪にあると信じていた。しかし、彼は贖罪を罪や罪責からの解放や神の憐れみを得る唯一の根拠としては確認しない。「自己否定と禁欲を説く修徳の神学」が、救いの根拠としての贖罪に付加されている。従って、「心情と生活の聖潔」を、義認の結果としてでなく原因として数える傾向がある。愛を強調する時にも、「神から人への愛」よりも「神と隣人への愛」に力点が置かれる。すべてが永遠の生命に至る救いの備えとしての「個人的な聖潔」に集中される。「もし、宗教がわれわれを新世界へと甦らせ、人生の新しい目的に向けて精神を全く造り変え、心を占有し、愛の本流を

変えてしまうならば、もし、新しい喜びと悲嘆、新しい希望と恐れが与えられるならば、もしわれわれにあるすべてのものが新たにされ、われわれに賜っている聖霊によって神の愛が注がれ、われわれが神の子であると聖霊が心に証して下さるならば、われわれはただ名目上ではなく正真正銘のクリスチャンである。聖なるイエスを信じて、キリストの日に労し走ったことが空しくなかったことを喜ぶのである。⁽⁴⁵⁾『再生の基盤と理由(The Grounds and Reason for Christian Regeneration) 1739年を出版した後、ローはヤーコプ・ベーメ(Jakob Boehme)の神秘主義へと傾斜を強めていく。⁽⁴⁶⁾ ウェスリはローに多くを負い、特に霊性の神学や信仰生活の実践的勧告に多くを学んだ。にもかかわらず、ローに義認論と新生論の欠落を見て厳しい批判を続けた。ローが「すべての現実の生活状態をピューリタンの厳しさで審査し、結果としてカトリック的神秘主義のあらゆる情熱をもって禁欲の行ないと自己否定を要求し」⁽⁴⁷⁾、義認や新生の脆弱な「実践的聖化を一方向的に強調する傾向」を強めたからである。

次に、テイラーに触れたい。⁽⁴⁸⁾『聖なる生き方の規則と実践』(The Rule and Exercise of Holy Living) 1650年、と『聖なる死に方の規則と実践』(The Rule and Exercise of Holy Dying) 1651年、の両書は、⁽⁴⁹⁾青年ウェスリを聖書そのものへと導いたばかりでなく、ローからの影響と同じく、ウェスリが生涯にわたって模倣し実践した実際の感化を与えた。反面、若いジョンが1725年6月18日と7月29日の両日、母スザンナに宛てた手紙が示す疑問と批判を、テイラーの謙遜観に対してすでに抱いていた。彼は、テイラーの実践的修徳によっては、福音信仰と救いの確かさの開眼へ近づくことができないことを察知していた。ポーター(H. B. Porter)の研究によれば、テイラーの新生論は、教会、礼拝、洗礼と関わっていたという。⁽⁵⁰⁾ 洗礼論の力点も、パウロによる「キリストの死と復活に与かること」よりも、ヨハネ福音書の説く「新生の恵み」に置かれていた。テイラーの新生観

は、当時の国教会の「洗礼における新生」という考え方にピューリタンの倫理主義の強調を加味したものではなかったか。そのような新生観に対してウェスリが、ローに覚えたと同様の不満と批判を抱いたことは当然であった。

(2) ホウィットフィールドの新生論

「ホウィットフィールドが到るところで強調した基本的な諸教理が、以下のものであることを、あなたがたが知らない筈はない。そして、それらは言わば二語に要約され得るのではなからうか。すなわち、新生と信仰による義とである。」⁽⁵¹⁾ これは、ジョン・ウェスリがジョージ・ホウィットフィールド(George Whitefield, 1714-1770)の死に際し、1770年11月18日に行なった告別説教の一節である。確かにホウィットフィールドは生涯にわたり、「荒野に叫ぶ声」として、母国の各地、また、7回にわたって訪問し、ついにその地で倒れた新大陸の各地において、聖霊による新生の恵みを説き続けた。彼が「キリスト・イエスにおけるわれらの新生の本性と必要性(The Nature and Necessity of Our New Birth in Christ Jesus)」と題した説教を語り始めた1737年初期には、ウェスリはまだジョージア宣教における悪戦苦闘の真直中にいた。

この説教は、第2コリント5:17をテキストとする。①「キリストにある」とは、②新しく創造された者とは、③「キリストにあって」とは、④全体的な勧め、から成る。⁽⁵²⁾ さて、ホウィットフィールドの心には、既に受洗した多くの会衆は、教会の構成員でありながら聖霊による新生の恵みを証し得ない現実が重くのしかかっていた。彼が「瞬間的な新生の恵みを聖霊にあって体得せよ」と迫る説教運動を展開した時、異説への恐れと反発が、当時の国教会聖職者と信徒を襲ったとしても不思議ではなかった。

彼は、神の選びや予定を強調して、当時の国教会福音派運動の内にあったカルヴィニズムの色彩を次第に鮮明に帯びていく。それは非国教徒の多くにとっても歓迎すべき事柄であり、共同歩調をとりやすい神学的傾向であった。彼の説教をウェスリのそれと比較する時、多くの類

似点とともに、いくつかの相違点に気付かせられる。①ウェスリの頑丈な神学的骨格を有する説教に比べ、「大衆を相手に感情的高まりを迫る平易な福音的説教」という印象が強い。②ウェスリはホウィットフィールドがよく用いた、新生を意味する「聖霊のバプテスマ」という用語に対して、神学的に慎重であった。特に1739年秋以降は多用を避けている。逆に、心情の聖潔、全き愛、完全な救い、全き聖化、神の像の完全な回復というような用語を多用した。③ウェスリの場合、ホウィットフィールドに比べて、新生論が教会論や礼典論と深い関連を持っている。ウェスリの教会論的神学の特徴がうかがえる。

(3) ジョナサン・エドワーズ(Jonathan Edwards, 1703-1758)の新生論

エドワーズは、第18世紀ニューイングランドにおける「大覚醒」運動の父である。⁽⁵³⁾ 母方の祖父ストダード(Solomon Stoddard, 1643-1729)の偉業を継承する。やがてノーサンプトンから起こった信仰復興運動の波は、エドワーズをして個人の回心経験(conversion)を強調するように導いていく。聖霊の働きが人々を捉えた時、罪に流される生活の廃棄が起こり、熱心な信仰実践が始まる。聖書を読み、祈りや黙想を励み、集会に集って指導を仰ぐように人々は変化した。エドワーズは、回心と新生を同じものと理解する。「回心は、神の御力の偉大な栄光に満ちた御業である。死せる魂に侵された命と心とが瞬時にして変えられる。恵みが植付けられその働きを示すのは、ある人々の場合は他の人々より漸進的であり、恵みが始められた正確な時についても、多様な人々が多様な事実を示すけれども。」⁽⁵⁴⁾ 回心は神の愛を原理とする。それは、すべての恵み、潔さ、徳性へと、罪人を全く変えたもう聖霊の御業である。

祖父から教会の指導を受け継いだ当初は、回心を経験しない者にも聖餐を開放する従来の方針に従っていた。1748年12月以降は、神に近づく唯一の方法として、意識的な回心を強調することとなった。もし、回心が教会加入の基準となるなら、信徒の子どもたちに「半途契約(Half-

way Covenant)」として許していた陪餐の特権を廃止せねばならない。彼の周囲には、個人的回心経験の恵みを感謝する人々と、祈り求めても回心経験を得ることができない人々が共存することとなった。

ウェスリの新生論との関連を考える時、新生論を「回心という観点」に引き寄せて考察する傾向があるが、それらは、このようなエドワーズや大覚醒運動の「回心観」の直接、間接の影響を受けているのではあるまいか。この点は、結論部分において論述したい。

2 ジョン・ウェスリの新生論

(1) 新生論についての基本線——『日記』の一節から

ウェスリの新生論の基本線を定める一応の目処を設定できるであろうか。筆者は1739年9月13日の日記に注目したい。この日、彼は国教会のハワード司祭から、国教会の教義とウェスリたちの教義との相違点について質問を受けた。

「どんなに考えても相違点は存在しない。」との返事に対し、ハワードは「では、国教会の他の司祭たちとはどう違うのか。」と食い下がる。その司祭たちが「自分では気付かずに国教会の教義そのものから外れている場合に限って」と断りながら、ウェスリは、義認と聖化、善行との関わり、外的な事柄と内的な事柄などについて説明した後、新生について触れている。「最後に、彼らは新生のことを洗礼そのものを指すかのごとく、外的な事柄のように、または、せいぜい外的な不行跡から外的な善行への変化、不徳の生活からいわゆる有徳な生活への変化に過ぎないかのように語る。わたしは新生が内的な事柄であるべきだと考える。内的な不行跡から内的な善行への変化、悪魔の像(この像でわれらは誕生した)から神の像へとわれらの最も内なる本性が全く造り変えられる変化、被造物の愛から創造主の愛への変化、世的な、感覚的な愛情から天的な聖なる愛情への変化であると考えている。一言でいえば、暗黒の諸霊の気質から天にある神の御使たちの性質へと変化させられる

ことである。」⁽⁵⁵⁾ 当然、この基本線は、彼の説教においても繰り返し説かれている。

(2) 「説教」の分析に見る新生論

ウェスリの新生論を正しく理解するため、特に、その神学的な内容を理解するために最も重要な資料は「説教」であろう。(日記、神学論文、新約聖書注解、書簡から新生論を考察することも重要な研究であるが、別の機会に譲ることにしたい。) Gordon Ruppは新生論の資料として3篇の説教、すなわち、「新生」(The New Birth)、及び「新生のしるし」(The Marks of the New Birth)と「神から生まれた者たちの偉大な特権」(The Great Privilege of those that are Born of God)という一対の説教の3篇を挙げる。⁽⁵⁶⁾ Thomas Oden はそれらに「御霊の初めの実」(The Firstfruits of the Spirit)と「奴隷の霊と子たる身分を授ける霊」(The Spirit of Bondage and of Adoption)、及び、「われら自身の救いの達成に努め励むこと」(On Working Out Our Own Salvation)の3篇を加えて編む。⁽⁵⁷⁾ Timothy L. Smithは、上記「新生のしるし」と「信仰による救い」(Salvation by Faith)とを用いて、ウェスリの新生論を論じている。⁽⁵⁸⁾

①説教「新生」について

(a) 説教の背景

アウトラーは、BE版説教「新生」の解説において、以下のように述べる。①この説教の神学的な背景として、イングランド国教会の救済論が「洗礼における新生」の教理を伝統的に保持している事実が介在する。②ウェスリは、初期には当然のことながら、比較的、後期に至っても、1758年の『洗礼論』が示すように、新生の恵みが「通常は」洗礼との関わりにおいて与えられるという立場を守っていた。③しかし、信仰復興運動が進展して、「洗礼的新生」の立場と「新生経験の重視」の立場との間に議論や対立が起こるようになった。そのような状況で群れの内外から要請され、自らの立場を明らかにするべく、彼は過去何度も繰り返してヨハネ3:7に基づき行ってきた説教を「蒸留化して」活字にした。それがこの説教であった。アウトラ

ーは、説教の回数にも触れ、1740年代に1回であった回数が、50年代には49回に増えている事実を指摘する。従って、この説教に、信仰復興運動の進展と彼の神学的成熟の軌跡を見ることが許されよう。⁽⁵⁹⁾

(b) 義認と新生の関係と相違—第1のポイント

この説教は「義認と新生」の関係と相違点から説き起こされる。「キリスト教の全領域にわたって根本的教理と言われ得るものがあれば、それはまさしく義認の教理と、新生の教理のふたつである。前者は、罪の赦しに際し、神がわれわれのために(for us)行われる偉大な御業と関わり、後者は、われわれの頹廃した本性を更新するに際し、神がわれわれのうちに(in us)行われる偉大な御業と関わっている。両者は、時間的な順序では後先を付けられない。イエスにある贖いを通し、神の恵みによってわれわれが義とされる瞬間に、われわれはまた『霊から生まれる』。しかし、いわゆる思考の順序では、義認が新生に先立つ。われわれは最初に神の御怒りが取り去られることを考え、次いで、御霊がわれわれの心情に働くことを考える。」⁽⁶⁰⁾ ウェスリは、義認と新生とを「一つの恵みの両側面」に位置付ける。改革者の新生論に基礎を置きつつ、彼らとは異なった解釈を試みた。新生は、義認に対して「同じ事柄を示す異なった表現(only different expressions denoting the same thing)」であり、義認、すなわち「神との関係の変化」から決して分離されない。新生が救いにおける神中心性、キリスト中心性から切り離されること、または、単なる人間的経験の次元に位置付けられてしまうことを許さない。なお、改革者、特にイングランド改革者とそれ以後の義認信仰の伝統が、ウェスリに正しく継承されている事実については、筆者が前稿において論じた通りである。

同時に、ウェスリは「義認の一面的強調」を極力、警戒した。義とされたと言いつつも福音に基づく生活の内実を失い、救いが概念だけで空転してしまっただけで無律法主義的な実際生活に流されてしまう危険性を熟知し警戒したのである。

もう一方の危険性、つまり、信仰生活における現実的变化を強調する余り、主イエス・キリストや聖霊なる神御自身から目が逸れ、単なる律法遵守主義や熱任主義の人間中心主義に頽廃する危険性も否定できない。敬虔主義の流れやウェスリ神学の陣営に、そのような危険が付きまとい易いことも事実であろう。

カルヴァンの新生論は聖化論を内包する形をとっているが、ウェスリの場合には、「新生は、聖化の一部であるが、そのすべてではない。聖化への門であり入口である。新生した時、初めて聖化が、内的であって続いて外的ともなっていく潔さが始動する。それから、かしらなる御方へとキリストにあって徐々に成熟していく。」⁽⁶¹⁾と述べる。新生は聖化と関わりつつも異なった本質を有するとした。つまり、新生は「別の一面」として義認と深く関わり、同時に、「その入口、門」として聖化と深く関わる。新生が義認と聖化の両概念の「架け橋的な役割」を持つ点を洞察し、義認、新生、聖化の3つの観点における「救いの神学の統合」を示したのがウェスリその人であった。

ウェスリ神学におけるこの架橋性と統合性とは、「for us と in us とを *and* で結ぶ神学」と表現してもよい。義認と新生、義認と新生と聖化、罪や罪責からの解放と罪の力や罪の本性からの解放、賜物としての信仰と課題としての信仰、等々。「多層、多面なものを互いに関係付け統合していく神学」であり、それぞれの峰を「聖化の神学」という恵みの最高峰へと連ならせる神学こそ、ウェスリ神学の醍醐味であろう。ルターの場合、義認に置いた力点によって、神の御前での (*coram Deo*) 一切の人間的な功績を拒み、「聖霊と御言と洗礼における新生」という基盤に立つ十字架の神学を展開した。カルヴァンはルターの基本線を継承しながら、「聖化を内包する独自の新生論」を展開する。各自の特色と相違は、福音の豊かさという多彩色が彩るものであって、正邪の物差しで断じる類いのものではない。聖書と教会史における新生の教理は、各自の多様な神学的特色と思想的貢献を通して、

その内容をより豊かに洞察され得る。確かに、真理内容を論述する手法の違いや問題点を把握する際の長短は存在する。弱点や誤謬や時代的背景からも自由ではない。しかし、各々の論点を関連性と統合性において理解しようと努める時、その努力は必ず、主イエス・キリストの救いが示す多様性の洞察に繋がり、キリストの体なる教会の伝統の豊かさに繋がって理解されていくに違いない。

(c) 新生の理由、本性、目的——第2のポイント

われわれは、なぜ生まれ変わらなければならないか(新生の理由)、どのようにして新生しなければならないか(新生の本性)、何のためにわれわれは新生しなければならないか(新生の目的)が続いて明らかにされていく。

「新生の理由」について、彼は創造論、人間論、原罪論を通して説く。人間は神ご自身の不死と栄光の像として神の自然的な像 (*natural image*) に創造され、世界の管理という業に携わるべき者として政治的な像 (*political image*) に創造された。また、究極的に義と聖なる道徳的な像 (*moral image*) にかたどって創造された。被造者としての人間は、以上の三重の像において存在する。創造の時、人は真の義と聖とに満たされていた。しかし、人間は不変の者として創造されたのではない。「立つことはできるが、同時に、倒れ易い者として創造された。」しかも、人間は故意の敵対と不従順によって、自己を神の座に据え、反逆と倒錯に生きることを通して創造の美の高みから墮落した。死の中の最も恐ろしい死、つまり、神に対する死を選んだ。神の知識と愛とを失った。神の生命を失い、栄光の像を破壊し、霊的な死人となってしまった。全人類はアダムにあって霊的に死んだ者として、罪の中に生まれてくる。女から生まれる者はすべて、それ故に、神の霊によって新生しなければならない。ここに新生の理由があり根拠がある。新生は単なる自然的成熟の一段階ではない。人間的な精神革命でも教育による覚醒現象でもない。自然のままでも何かが起こり、「自己の義において」何かに変わることはない。神が主イ

エス・キリストの御業により、信じる者の心と生活を聖霊にあって再創造される救いの御業である。

新生論が創造と原罪の教理の光の下で見られ、創造論と罪惡論が救いと新生の教理の光の下で見られている。新生の前提は、人が「本性の完全な墮落」に苦しみ、救いを求めている現実にある。病いを知らない者は医者のもとに来ない。原罪を正しく捉えない限り、新生論も成り立たない。誠実に純粹に神と人への愛に生きるべく創造された人間が、神への従順に代えて背反を犯した。確信が恐れに、純潔と幸福とが汚染と呪いに変わった。神の栄光を映す像が、虚しい誇り、我利我欲、肉欲に満ちた悪魔の像を映す。神の像の創造のすばらしさゆえにこそ、原罪の悲惨が逆に浮き彫りにされる。ウェスリは、病み苦しむ現実を無視する生き方に反対した。自然的な放置や気休めの薬や教育的訓話で癒されるような病いの現実ではない。正に「死に至る病」である。⁽⁶²⁾ 靈的で倫理的(生活的)な新生のみが、信じる者の生活に聖性と真の幸福とを再創造する。「あなたの罪が赦された」という神の宣言を、現実生活の直中において聞き続け信じ続けねばならない。

次に、ウェスリは靈的新生の内容に入る。難解なテーマを聞き手がその程度に従って理解できるように、ケインブリッジ・プラトニストなどが用いた比喩に倣って説明する。自然的な領域から靈的な領域へと、比喩が手引きをして導いてくれる。⁽⁶³⁾ さて、人間はどのようにして新生しなければならないか。論議の領域は聖靈論と救済論へと進む。主イエスは、霊を「風」と語られた。聖霊による新生の御業は、事実、遂行されるが、言葉や概念で説明はできない。風(霊)は実在するが捕らえることが出来ないのと同じである。ここで、身体的な誕生と靈的な新生とを、「胎児と新生児」という類比で考える。胎児は新生児と同じように、目、耳、鼻、口を持つ。しかし、これらの器官の機能は誕生を境として胎児と新生児とでは大いに異なる。靈的な新生もこれと同じである。新生以前、胎児の

目と同様に目は存在するが、靈的な事柄を見ることができない。靈的な感覚が全く閉ざされている。しかし、神から生まれるや否や、これら全ての事柄に変化が生じる。彼の心が開かれ、開の中から光が照り出でよと語られた神が、その心を照らし、彼はキリストの顔に輝く神の栄光を、即ち、神の栄光に輝く愛を見る。その耳は開かれて「しっかりせよ。あなたの罪は赦された。…行け、今後は罪を犯さないように。」という神からの内的な声を彼は聞くことができる。

ウェスリは、国教会の説教集から「神の靈の力強い働きを心に感じる。」という言葉を用いる。⁽⁶⁴⁾ 卑劣で肉感的な意味において、感じるという言葉を用いるのではない。「その心において、神の靈が与えて下さる恵みを感じ、内的に知覚していること」⁽⁶⁵⁾ にほかならない。人知で測り知ることができない神の平安を感得し、自覚できる恵みである。「感情、意識、感覚」と関わる「聖霊から賜わる恵みの感性」である。新生者が今、恵みによって生かされている事実を実感する。「神がその靈によって彼を甦らせたがゆえに、彼はイエス・キリストによって神に向かって生きている。…神は彼の魂の上に絶えず息を吹きかけておられる。そして彼の魂は神に向かって息づいている。恵みは彼の心の中へと下り、祈りと讃美は天に向かって昇る。」⁽⁶⁶⁾ ウェスリの「靈的な恵みの感性の神学」を、単なる「感情の神学」と曲解してはならない。

新生の本質とは何か。彼は「神が魂をいのちに導かれる時、神が魂を罪の死から義の生命へと甦らせてくださる時、神が魂の中に遂行されるあの偉大な変化である。」と答える。⁽⁶⁷⁾ 「一言で言えば、新生とは、地上的な、感覚的な、悪魔的な心が、イエス・キリストにあって抱えている心に変えられるあの変化を言う。」⁽⁶⁸⁾ 次に、新生の目的を問うが、救済論と終末論とが基盤となる。ウェスリは新生の目的を「潔めのため」と明言する。福音的な聖化とは何か。それは外的で義務的な行為の繰り返しではなく、心に刻印された神の像、キリスト・イエスにある全き心そのものである。神への感謝に満ち溢れてい

る愛である。われわれの思想、言語、行動を、主にあつて神の御意にかなう犠牲として献げさせる神の愛である。心の像における「新生の入口」なしに、この潔めは決して存在し得ない。新生は永遠の救いのためである。新生なしに潔めも幸福もあり得ない。ウェスリが言う幸福とは、この世と来るべき世にあつて成長し続ける恵みの祝福である。⁽⁶⁹⁾

新生の恵みは、神が主イエス・キリストにあつて再創造される救いの刻印である。人間の意志、心情、認識、自覚、感性など諸々の働きの中に刻印され、神の瞬間的な業、また、漸進的な業として与えられ、完成されていく聖霊の現実の御業である。主イエス・キリストにあつて与えられ全うされる終末の希望の業の開始である。

(d) 結論的な考察——第3のポイント

第1に、新生と洗礼とを同一視してはならない。ルターの『大教理問答』では、洗礼の「しるし」が、「事柄そのもの」としての新生から区別されている。イングランド国教会の教理問答書でも同じ答えであるなど、教会の伝統を例証することを忘れない。第2にその事実立つ時、以下のような微妙な関係に気付く。即ち、新生は常に洗礼に伴うとは限らない(it does not always accompany baptism)という事実である。両者はいつも共に存在するとは限らない(they do not constantly go together)。しばしば、内的な恵みがないところに、外的なしるしが存在し得る。ただし、幼児洗礼はこのコンテクストで論じられてはならないと、ウェスリは注意深く除外している。

第3に、新生と聖化とを同一視してはならない。「最初に神に向かつて生き始めて以来、徐々に魂の中に行われる漸進的な働き」が、聖化である。新生は聖化の一部分であつてその全体ではない。新生してから聖化が、つまり、内的な外的な潔めが始まる。第4に挙げるのは、ウェスリの会衆が幼児洗礼を受けた人々を多く含んでいたと思われる点である。彼は会衆に語りかける。「洗礼を既に受けたという外的な事柄に安住するな。理性を用いる前に、神に聖別された

ことは恵みであろうが、今、その理性を神への反逆に用い続けている事実に目覚めよ。悪魔の業を拒否して洗礼を受けたのに、悪魔の業に従うことで自分の洗礼そのものを否定している。教会に行き、聖礼典に与かっていることは素晴らしいことである。しかし、多くの恵みの手段に従うその根底に、新生の恵みそのものが必要である。この内的な神の恵みは、他の何物をもってしても代用できない。もし、新生を体験していないならば、『朽ちない種、主の御言によって生まれさせ、主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて日々、成長させて下さい』と祈ることを勧める。」と。

② 説教「新生のしるし」について

アウトラーは、この説教の背景を説明する。一方において、ウェスリは伝統的な聖礼典観に立ちつつ、他方、創造者なる聖霊(Vivificator, 「ニカイア・コンスタンティノポリス信条」のラテン本文から)による新生のしるし(特権)としての、信仰、希望、愛に満たされることを力説した。新生した信仰者は神の力(特権)に満たされ、罪を犯さず、心と精神とを平安で満たされる。この主張は、やがて彼を「無罪性をめぐる多くの誤解と混乱」に巻き込む結果となる。逆に、ウェスリの罪惡観が神学的に深化していく要因ともなる。本説教は、1739年から約20年間、繰り返して説教されたと言う。⁽⁷⁰⁾

「新たに生まれる、神から生まれる、聖霊によって生まれる」ことに、どのような特権があり、しるしが伴うのか。新生の特権(彼は「力」と訳すよりも「特権、権利」と訳している)は、神の憐れみにより、通常は(ordinarily)、洗礼に付与されている。特権の第1は信仰である。ウェスリはここで、新生が感情の状態を指すのではなく、御父より御子イエス・キリストにあつて聖霊を通して与えられる特権であると強調する。信仰とは、概念的で思弁的な信仰の命題への「同意」のことではない。それは死んだ信仰である。生きた信仰とは、神がその人の心にもたらされる意向(気質)であり、キリストの功績のみによってその罪が赦され、和解の恵みが与えられ

ているという「神への確実な信頼と確信」である。そして、自己放棄と罪に勝つ力と平安という「信仰の実」を結んでいく。

第1ヨハネ3：6以下は「救いの土台としての神の愛の大きさ」を証する。神の種が留まっている以上、罪を犯すことができないと明言する。J. Herveyのように「習慣的に」という句を聖書の本文に補ってはならないと注意する。⁽⁷¹⁾

第2の特権は希望である。生きた希望とは、神がイエス・キリストにあって贖いを成就し、主の復活によってわれらを新生させ、生きた望みに満たして下さる希望を指す。まず、神的な誠実さに支えられ生かされているという聖霊の確証と、われわれの霊、または良心の確証、次に、神の子とされ、神の栄光の相続人とされるという終末的な保証が、聖書の意味する希望である。証人は聖霊御自身である。内容は、神の苦難の相続人であるわれわれは、同時に、神の永遠の栄光の相続人でもあるという保証である。聖霊にあって、この希望にあって、キリスト者の悲しみと苦難とは慰めと喜びに変えられていく。

新生者の第3の特権、最大のしるしこそ愛である。聖霊によって心に注がれる神の愛がその根底を成す。新生者は一つの霊となるほどに主に結び合わされ、その魂はキリストに寄り掛かり、キリストを最善、最美な御方として選び出す。隣人愛という第1の実は、この神の愛から必然的に生まれてくる。第2の実は、心と生活の両面での、神への全的な服従と一致の生活である。

新生者、すなわち、聖霊によって生まれた者が神を信じて希望を抱き、「あなたがたをこのように愛して下さった神を、あなたがたがどんな被造物をも決して愛したことがなかったような、そんな愛で愛し、自分たちと同じようにすべての人を愛さざるを得ないほどになる。」⁽⁷²⁾ 愛が心の中だけでなく、すべての行為、行動において炎のように輝き出す。全生涯が一つの愛の労苦となり、不断の服従になる。問題は、洗礼によってどのように造られたかではなく、今、あなたがたが何であるかである。水と霊から生まれ

たかどうかではなく、今、聖霊が現臨される神の神殿かどうかである。受洗していても、今、そのような生活を生きていない多くの人々がいる。洗礼に与かったことを詭弁や逃避として用いるな。洗礼の時、神の子とされ、天国の相続人とされたことを誰が否定するか。しかし、この事実にも関わらず、今、悪魔の子であるならば、新生しなければならない。受洗者か未受洗者かは別にして、神の子となる力を受け、子たる身分を授ける霊を再び受ける必要がある。これがウェスリの、新生に関する福音の直截な使信である。

③ 説教「神から生まれた者たちの偉大な特権」について

ウェスリはこの説教の冒頭において、「新生について」と「新生のしるし」という二つの説教の基本点を反復する。第1に、「すべて神から生まれた者は」という句の意味は何か、第2に、「罪を犯さない」とは、どのような意味においてか、の論述が続く。

神から生まれた者とは、「信仰によってその魂への継続的な働きを感知し、霊的な応答として、その受けている恵みを絶え間ない愛と讃美と祈りにおいて返納している者」のことである。⁽⁷³⁾ 次に、「罪を犯すことができない」という句の意味を問う。ここで言う罪は、現実の、自発的な律法の違反としての、外的な罪である。新生者は、「信仰と愛とに留まる限り、祈りと感謝の念をもつ限り、・・・そのような仕方では罪を犯すことができない。」⁽⁷⁴⁾ では、現実的に、新生した者が犯す罪の背反の事実はどうなるか。ダビデは信仰の人、祈りの人であったが姦通と殺人の罪を犯したではないか。パウロとバルナバの対立の事実はどうか。ペテロの変節はどうか。「信仰に留まらない限り、別人のように罪を犯し得る。具体的には、信仰の確信から動揺して、消極的な内的な罪へ陥り、積極的な、内的な罪に自分を明渡し、信仰を失って救いの神を見失う。神への愛を失って外的な罪を犯す。」ウェスリは、ダビデ、ペテロの例から墮罪を詳しく説明する。怠慢の罪(sin of omission)、内的な罪が入り込

み、信仰を喪失させて外的な罪へと誘導する。愛によって働く信仰に生きる時でさえ、誘惑は絶えず襲ってくる。魂の愛の目が、神の上に注がれていれば、誘惑は消え去る。さもないと、内的から外的へと悪魔の罠が待っている。

従って、問題は、神からの愛に対して、われわれの側からも信仰と愛の応答が、しっかりと交流しているかどうかに懸かっている。神の先行的な愛への、神の命の息吹きへの、魂の反応と応答が生き生きとしていないならば、暗黒に襲われるだけである。神の恵みに生き、世に勝つ信仰に堅く立っている者さえ罪に陥り、信仰の破船を経験するのだから、恐れ戦いて神の御声を聞き、心を注ぎ出して祈るように心掛けよ。そうすれば、常に信じ、常に愛して、罪を犯すことはない、とウェスリは強調して説教を結ぶ。

④その他の説教から

上述の説教と重複しないように留意して、一、二の説教を読んで見よう。「神のぶどう園について」(On God's Vineyard)を読む。⁽⁷⁵⁾ 彼はメソヂストの群れに、狭義の「神のぶどう園」を見る。この群れは、義とされた者が「新たに生まれ、上から生まれ、聖霊にあって生まれる」ことを信じる。新生は魂の偉大なる一新であり、「聖霊による誕生」である。外的な変化でなく内的な変化、「地的な、肉的な、悪魔的な心情から、キリスト・イエスの心情へと変化させられること」である。

同様の文脈が、説教「忍耐について」(On Patience)にも流れている。ウェスリは語る。「われわれがキリストにより、無代価で義とされる瞬間に、われわれが愛する御子によって受け入れられる瞬間に、われわれは新たに生まれるのであり、上から生まれるのであり、聖霊によって生まれるのである。そして一人の女から生まれる時、肉体になされたと同じ大変化が、われわれが聖霊によって生まれる時、われわれの魂の中にももたらされる。被造物への愛が創造者への愛に、世を愛する愛は神を愛する愛に、地的な欲望、肉の欲、目の欲、持ち物の誇りは、その瞬間に神の大きな力によって天的な欲求へ

と変えられる。意志の嵐は止められて神の御意志の中に沈み込み、誇りと高慢は謙虚な心に、怒りも荒れ狂うすべての情欲も黙して、静けさ、柔和、穏やかさへと変えられる。地的、情欲的、悪魔的な心が、『キリスト・イエスの心』に場を明け渡すと要約できよう。⁽⁷⁶⁾ しかも、成熟の過程としての聖化は、新生と同じでない。一方において、無代価で、十全で、現在の義認と新生が、他方において、心情と生活における全き聖化とがある。両者が同じ熱心と勤勉とをもって追い求められるのである。

説教「神なき生活について」(On Living without God)において、ウェスリは語る。「全能の聖霊が世にあって神なく歩む者の心を打ち砕きたもう。心の頑なさは砕かれ、すべてが新しくされる。義の太陽が現れ出て魂を照らす。イエス・キリストの御顔に宿る神の栄光の輝きをもって照らす。彼は新世界の存在である。彼をめぐるすべてのものが新しくなっている。そのようなことは、彼の心には思い浮かびもしなかったことである。開かれた眼をもって、彼は凝視する。⁽⁷⁷⁾ ウェスリは聖書に証されているキリストにある新創造の独自性と卓越性について語り続ける。

IV 付随的な二つの論点——結論にかえて

小論を結ぶに際し、①ウェスリの新生論をめぐる様々な論点のうち、特に、回心という視点から新生を見ることの問題点について、②「洗礼における新生」に関するウェスリの神学的立場について論じておきたい。

(1) 新生と回心について

ホランド(B. G. Holland)は、初期メソヂズムにおける洗礼論の研究を通して、ウェスリが新生と再生とを同義語と見ていること、回心という語を多用していないことを突き止めている。にもかかわらず、成人の新生と回心とを同一視する誤解に陥っている。⁽⁷⁸⁾ それは決してウェスリ自身の用法ではなかった。むしろ「伝統的なメソヂストの用法に従った結果」であろうと、ボーゲン(Ole E. Borgen)はホランドを批判す

る。⁽⁷⁹⁾ ポーゲンによれば、このような誤解に陥ったのはホランドひとりではない。キャノン(W. R. Cannon), パリス(J. R. Parris), クッシュマン(R. Cushman), スターキー(L. M. Starkey)も似たような誤解に陥っていると指摘する。⁽⁸⁰⁾ では、なぜ、そのような混乱が相次いで生じたのであろうか。筆者は既にその理由の一つを、ジョナサン・エドワーズとの関連において述べた。上記の学者がすべて米国のメソヂスト教会を背景にもつことを考え合わせると、単にメソヂストの伝統のみならず、米国諸教会の歴史的地盤に染み込んでいる「回心観」の強烈さをうかがうことができる。

もう一つの理由が考えられる。それは「回心」という概念がもつ包括性である。ウェスリ自身は、『新約聖書注解』のマタイ18:3や使徒行伝26:20などで、回心を以下のように理解している。①回心は、悔い改め、義認、新生、信仰、確証を含む、瞬間的で比較的短期間のものである。②回心には、聖化と同義語のものがある。①の意味で用いる時、回心は、新生を包含して用いられることになる。しかし、②を勘案する時、新生と聖化とを峻別したウェスリの意図からすれば、新生と回心とを同じ意味や包含性において用いてはならないことになる。以上の理由から、ウェスリ自身の厳密な用法に従って、両者を注意深く区別して用い、同義語として用いないように留意すべきである。

(2) いわゆる「洗礼における新生(baptismal regeneration)」をめぐって

この課題についての近年の貢献は、上記のウェーデンのウェスリ学者ポーゲンの研究であろう。ポーゲンは自分の見解を述べるに当たって、何人かの研究者、特に、ホランドを批判する。ホランドはウェスリが「洗礼における新生」を強調すると評価しておきながら、彼が後年、その考えを変更したと断定しているからである。⁽⁸¹⁾ 逆に、ポーゲンは以下のように結論する。①ウェスリは終生、洗礼が新生のための効果ある恵みの手段であることを主張して止まなかった。彼の新生論から洗礼論的な視野が消えたこ

とは一度もなかった。②ウェスリは、新生が洗礼以外の恵みの手段、例えば説教や聖餐によっても与えられるという見解に立ったが、それは洗礼を軽視したり排除したりする目的からではない。『新約聖書注解』の使徒行伝22:16では、洗礼は初期教会では新生の「通常的手段」であったこと、ただし、「通常に」(ordinarily)行われた手段であって「唯一の」(only)手段ではないこと、などを挙げている。③「幼児洗礼」と峻別された「成人洗礼」において、成人の新生が「絶えず」(always)洗礼に伴う訳ではないとした。他方、それゆえに洗礼に新生が伴うことは一切あり得ないという断定も、どこにも見当たらない。⁽⁸²⁾ ウェスリは教會的な神学者として、新生と洗礼との両方を重視するので、両方を、安価な外的な恵みに陥れることに断固として抵抗したと言える。それは彼の洗礼観だけでなく、洗礼の実施にも実証されている。『日記』における彼自身の「幼児洗礼の恵みへの感謝」を読んでも、⁽⁸³⁾ また、教区司祭でなかったにもかかわらず、授洗例が多い実例を考え合わせても、⁽⁸⁴⁾ 新生と洗礼とを共に重視する彼の基本的態度がうなずける。

筆者は「洗礼における新生」を幼児洗礼との関連に絞って論じたい。ウェスリは『洗礼論』と『幼児洗礼論』を著し、⁽⁸⁵⁾ 幼児洗礼が聖書に支持され、初代教会以来の伝統に従い、理性に合致したものであるという所論を展開している。成人のみならず、幼な子も、神が定められた恵みの手段を通して「キリストのもとに来る」必要があると強調した。キリスト者の家庭に与えられた幼児たちも、罪からの救いを得る必要がある。彼らをキリストにあるこの恵みから遠ざけることは、幼児を御側に招かれた主の命令に反することである。ウェスリの温かい眼差しは、成人の会衆の上だけでなく、常に子どもたちの上にも注がれていた。

彼の「幼児洗礼論」の基盤には、契約、割礼、教会、信仰の賜物などをめぐる恵みの理解が存在している。神の民としての両親からの子どもたちは、神御自身と神の新しい選民=教会との

契約のもとに生をうけた。洗礼は恵みの契約の新しい証印として、今、かつての割礼の役割をも果たす。子どもたちは、成人と同資格の契約の相続人である。さらに、信仰の賜物には、洗礼にあって信仰がおこされ、養われ、育てられるという一面と、今は隠されていても、将来、実現される聖霊の働きの約束を、今、洗礼にあって受け取るという他の一面とが存在する。考察を続けていくと、ウェスリの洗礼論に大きな影響を与えているのが、ジャン・カルヴァンの洗礼論であることが分かってくる。ネイグリー(D. Naglee)がこの点を指摘しているのは正しい。⁽⁸⁶⁾

ウェスリは、初期には幼児洗礼をめぐる国教会の伝統保持に熱心であったが、後期には消極的理解へと移って行ったという解釈が根強く存在する。そのような論者は、1784年の*The Sunday Service of the Methodists in North America. With other Occasional Services*の作成におけるウェスリの取捨選択の問題点、つまり、1662年版『公同祈禱書』の幼児洗礼の部分の省略を証拠の一つとして提出する。しかし、実際には、大幅な変更が見られず、幼児洗礼の一貫した保持が見られる。上述のアウトラーの示唆に学ぶように、ウェスリを取り巻く状況に激動があったことは事実であり、対立や論議の中で彼の神学的な強調点が揺れ動いたことも事実である。アメリカという新しい伝道地での礼拝指針を定めるに当たって、幼児洗礼の末梢部分の省略があったとしても何の不思議もない。しかし、それが決して幼児洗礼全体の否定につながっていないし、基本的な変更も加えられていないのである。

問題の核心は別のところにある。神の教会、神の家族に生をうけた「契約の子たち」への「神の一方的な契約愛と恵み」を、あれほど強烈に説いたウェスリが、同時に、安易な「洗礼と新生との同一視」を厳しく警告し、安易に「信仰告白、教会加入、恵みの手段、霊的約束としての洗礼」の上に胡座をかき生活を糾弾し、「聖霊による霊的新生の実を結べ」と迫った事実注

目すべきである。幼児洗礼において示された「ただ神の恵みのみ」という一方の極が、「神の恵みへの信仰の自覚的応答、統体的な潔め、更新、変容、倫理の高調」という他方の極と、彼の神学と実践の中で正しく対応している。その関わりと統合とに注目すべきである。別の表現を借りれば、「水のバプテスマ」と「聖霊のバプテスマ」との両面が、統体的に、不可分離的に強調されている。恵みを信仰において受領する際の「受動的な側面」と、愛によって応答し、働き続ける「能動的な側面」とが統合的に捕捉され、相補的に統合し合っている。ここにウェスリ神学のダイナミズムが見られる。もし、ウェスリが前者のみに立っていたとしたら、彼は当時の国教会の新生論や「洗礼における新生の教理」を一步も出ることを得ず、聖書と伝統と経験に基づいた独自の新生論を展開することができなかった。また、後者のみを強調していたなら、リヴァイヴァリズムの興隆と凋落との1頁を記すに止まり、新生論的、教会論的神学を樹立できなかった。

卑見であるが、幼児洗礼をどう考えるかは、洗礼理解の試金石の一つであると考えられる。幼児洗礼が恵みの基本的な性格を端的に問うているからである。ここでわれわれは、晩年のバルトが洗礼論を徹底させた時、幼児洗礼の拒否に傾いた事実に思いをいたす。⁽⁸⁷⁾バルトの長年の神学的思索のなかを、その聖書的な解釈とは別に、ウェスリがその会衆のなかに見て厳しく批判したような西欧キリスト教世界での伝統的安住と無意味化とがよぎらなかつたであろうか。まさに、バルトが批判した洗礼論の問題点を、ウェスリは新生論との関連において神学的に超克しようとしたのである。

筆者は、日本の教会の幼児洗礼の理解と実践は、その教会観や洗礼観同様、未成熟の域を出ていないと考えている。成人洗礼の現状以上に、幼児洗礼の状況は惨憺たるものではないか。ウェスリの新生論や洗礼論に学ぶ今、それと同時に、現在のわが国諸教会の状況を踏まえ、新生の問題を洗礼、特に、幼児洗礼との関連で捉え

直すことを一つの契機として、教会信仰と教会論そのもの信じ直し認識し直すことが重要ではないか。その論点をめぐる賛否以上に、論点そのものへの集中と徹底が不可欠である。さらに、日本の教会の宗教的、文化的背景は、欧米教会のそれとはかなり異なったものを持つ。この若い教会は、かつて国教会や領邦教会の伝統を持った経験がない。誕生と共に嬰兒洗礼を受けた多くの教会員を有することなど夢想だにできない歴史を持つ。そこに、バルトが生き、考えた幼児洗礼の背景と伝統と、わが国の諸教会の背景と伝統との相違点が存在するのである。日本の教会の歴史的状況は、現今の欧米教会のそれよりも、むしろ、古代教会における伝道と教会形成の状況や幼児洗礼の必要性により近いのではあるまいか。日本の諸教会にとって、家族、家庭、社会を広く深く視野に収めた真の教会観確立が急務である。ウェスリの「新生経験の強調」と「洗礼における新生」の雄叫びは、このような現代の諸教会に対して、特に多くの示唆を与え、その現実を激しく揺り動かすものがあるに違いない。

注

- (41) 第18世紀の最も一般的な新生論は、Daniel Waterland(1683-1740)の新生論であったという。*The Works of John Wesley* (BE.) Vol.3, Nashville, Tenn., Abingdon, 1986, p.507. 筆者はこの文献を入手できなかった。
- (42) Harald Lindström, *Wesley and Sanctification*, London, Epworth, 1950, p.126ff. 邦訳227頁以下。ほかに、Robert G. Tuttle Jr., *Mysticism in the Wesleyan Tradition*, Grand Rapids, MI., Zondervan, 1989, p.55ff. を参照。
- (43) J. ボズウェル「サミュエル・ジョンソン伝」1, 中野好之訳, 東京, みすず書房, 39-40頁。
- (44) W. Law, *A Serious Call to a Devout and Holy Life*, Wyvern Books, London, Epworth, 1961, p.91.
- (45) W. Law, "A Practical Treatise on Christian Perfection", *The Heart of True Spirituality: Selection from W. Law* (J. Wesley's own choice

- Vol.1) Grand Rapids, MI., Zondervan, 1985, p.24.
- (46) Eric W. Baker, *A Herald of the Evangelical Revival: A Critical Inquiry into the relation of W. Law to John Wesley and the beginnings of Methodism*, London, Epworth, 1948 を参照。
- (47) M. シュミット「ジョン・ウェスレー伝 I 回心への内的発展」, 高松義数訳, 東京, 新教出版社, 1985年, 119頁。
- (48) J. T. マクニール「キリスト教教会の歴史」, 吉田信夫訳, 東京, 日基教団出版局, 1987年, 282-287頁を参照。
- (49) *The Works of Jeremy Taylor*, Vol.5, London, Valpy, 1831を筆者は参照した。
- (50) Harry B. Porter, *Jeremy Taylor Liturgist*, London, S. P. C. K., pp.24-40. なお、ポーターは、テイラーの考えの背後にランスロット・アンドルーズ(Lancelot Andrewes 1555-1626)の影響を見る。
- (51) *The Works of John Wesley*, (BE.), Vol.2, Nashville Tenn., Abingdon, 1985, p.343. 邦訳「ウェスレー著作集」第5巻, 東京, 新教出版社, 1972年, 441頁。
- (52) Timothy L. Smith, *Whitefield and Wesley on the New Birth*, Grand Rapids, MI., Zondervan, 1986, pp.63-78.
- (53) 柳生望「アメリカ・ピューリタン研究」, 東京, 日基教団出版局, 1981年, 267-304頁, S. E. オールストローム「アメリカ神学思想史入門」, 児玉佳与子訳, 東京, 教文館, 1990年, 30-41頁, 曾根曉彦「アメリカ教会史」, 東京, 日基教団出版局, 1974年, 91-110頁, S. E. ミード「アメリカの宗教」, 野村文子訳, 東京, 日基教団出版局, 1978年, 65-75頁, F. H. リッテル「アメリカ宗教の歴史的展開——その宗教社会学的構造」, 柳生望, 山形正男訳, 東京, ヨルダン社, 1974年, 55-60頁。「形成」誌に連載中の森本あんり「ジョナサン・エドワーズ見聞録」も興味深い。なお、説教については「怒りの神」伊賀衛訳, 京都, 西村書店, 1948年ほか。
- (54) *Works of Jonathan Edwards*, Vol.1, ed. E. Hickman, Edinburgh, Banner of Truth, 1974, p.355.
- (55) *The Works of John Wesley*, (BE.) Vol.19, Nashville Tenn., Abingdon, 1990, p.97.
- (56) E. G. Rupp, *Religion in England 1688-1791* (Oxford History of the Christian Church.), Oxford, Clarendon Press, 1986, pp.419-421.
- (57) John Wesley, *The New Birth*, ed. Thomas Oden, N. Y., Harper & Row, 1984.
- (58) Timothy L. Smith, *op. cit.*

- (59) *The Works of John Wesley*, (BE.) Vol.2, Nashville Tenn., Abingdon, 1985, p.186.
- (60) *Ibid.*, p.187.
- (61) *Ibid.*, p.198.
- (62) E. M. アダムス「『新生』に関するウェスレーとセーレン・キェルケゴール」, 『ウェスレーと聖化』(ウェスレーとメソジズム双書2) 東京, 日本ウェスレー協会, 1964年, 9-19頁。
- (63) E. G. Rupp, *op. cit.*, p.421.
- (64) *The Works of John Wesley*, (BE.), Vol.2, p.193.
- (65) *Ibid.*
- (66) *Ibid.*
- (67) *Ibid.*, pp.193-194.
- (68) *Ibid.*, p.194.
- (69) ウェスリの幸福論については, たとえば, 説教「御国への道」(The Way to the Kingdom), *The Works of John Wesley*, (BE.), Vol.1, Nashville Tenn., Abingdon, 1984, p.223ff. を参照されるとよい。
- (70) *Ibid.*, pp.415-416.
- (71) *Ibid.*, p.420.
- (72) *Ibid.*, p.428.
- (73) *Ibid.*, pp.435-436.
- (74) *Ibid.*, p.436.
- (75) *The Works of John Wesley*, (BE.), Vol.3, Nashville Tenn., Abingdon, 1986, p.502 ff.
- (76) *Ibid.*, p.174.
- (77) *The Works of John Wesley*, (BE.) Vol.4, Nashville Tenn., Abingdon, 1987, p.172.
- (78) Bernard G. Holland, *Baptism in Early Methodism*, London, Epworth, 1970, p.35ff.
- (79) Ole E. Borgen, *John Wesley on the Sacraments: A Definitive Study of John Wesley's Theology of Worship*, Grand Rapids, MI., Francis Asbury Press, p.178ff.
- (80) *Ibid.*, pp. 147-159.
- (81) Holland, *op. cit.*, pp.35-42.
- (82) Borgen, *op. cit.*, pp.154-177.
- (83) *The Works of John Wesley*, (BE.), Vol.18, Nashville Tenn., Abingdon, 1988, pp.242-243.
- (84) J. W. クランメル「ジョン・ウェスレーと洗礼」, 東京, 更新伝道ウェスレー研究委員会, 1980年, 20頁。
- (85) "A Treatise on Baptism", *The Works of John Wesley*, Grand Rapids, MI., (reprinted from the 1872 ed.) Baker Book House, 1978. 及び, *Thoughts upon Infant-Baptism*, (W. Wall, The History of Infant Baptism, 2nd ed. H. Cotton, 4 Vols., Oxford, Oxford Univ. Press, 1844, に挿入)
- (86) David I. Naglee, *The Significance of the Relationship of Infant Baptism and Christian Nurture in the Theology of John Wesley*, Ann Arbor, MI., Univ. Microfilms International, 1966. また, J. C. English, *The Historical Antecedents and Development of John Wesley's Doctrine of Christian Initiation*, Ann Arbor, MI., Univ. Microfilms International, 1965; C. N. Cho, *A Study in John Wesley's Doctrine of Baptism in the light of Current Interpretations*, Ann Arbor, MI., Univ. Microfilms International, 1966; H. H. Knight III, *The Presence of God in the Christian Life: A Contemporary Understanding of John Wesley's Means of Grace*, Ann Arbor, MI., Univ. Microfilms International, 1987を参照。
- (87) バルト「教会教義学 和解論 IV」井上良雄訳, 東京, 新教出版社, 1988年。